

薩州頑質列伝

俺はおれ

岩元禧の巻

（昭和四七年一月一日より

南日本新聞にて連載）

あすから郷土読物

薩州頑質列伝

俺はおれ

第二集を連載

昨秋から今春にかけて愛読いただきました薩州頑質列伝俺はおれ」の第二集を十一月一日から再会いたします。

前回と同様 富貴や時流に媚（こ）びることなく、かたくなにおのれを信じる道を歩いていった、強烈な個性の持ち主の薩摩人を描くもので、執筆は第一集と同じく、久保統一記者（本社論説委員長）です。

第一回は、在任わずか二年四ヶ月ながら、鹿児島市の名市長といわれ、奇行に富んだ哲元権（き）の巻です。

なお、さし絵は東光会会員・上松康彦氏が分担します。

南日本新聞社

俺はおれ

岩元禎の巻（１）

六人兄弟

薩摩藩士の岩元基（もと）は、妻エイとの間に、男ばかり六人をもけた。家はいまの鹿児島市・照国神社の一角にあった。

漢学者でもあった基は、息子ぜんぶに一字名をつけた。明治二年生まれの長女（男の誤り）・禎（てい）を始め、祐（いつ）、祥（しよ）、禧（き）、祚（そ）、禄（ろく）と呼んだ。

一見、気まぐれな命名に映る。だがそうではない。六人とも示偏（しめすへん）である。中国では、祝などのように示偏はおめでたい文字だ。すこやかに幸あれ・と、愛児の息災を祈つての名づけであった。

しかし困ることがある。長子と末子は比較的、音がはっきりしているが、間の四人は呼ぶ方も呼ばれるほうも、「しよ」「き」「そ」では、短音のため不便を生じた。そこで親たちは、ナンバー郎をつけた通称を用いた。

つまり「禎一郎」「祐二郎」「祥三郎」という呼称の整理法である。だから本編の主人公は、通称「禧四郎」である。

主人公を語る前に、長幼の序という古典的な薩摩武家の慣習にしたがって、長兄の禎を語っておきたい。禧四郎が終生影響を受けた尊敬すべき唯一の人物であったこと、六人兄弟の中で、とくにおのれの信するままに生きぬいた珍しい人物であったからだ。

鹿児島高等中学造士館から一高に進んだ禎は、帝大文科大学（現・東大）哲学科から大学院をでて、明治三十六年に母校一高の教授に迎えられ、ドイツ語と哲学を教えた。三十四歳の時である。

以来、六十五歳の定年まで一高教授で通した。途中、いくつかの大学から、三顧（こ）の礼や破格の厚遇で誘われたらしいが、「一高が暇をくれまい」

と、自分でそう思いこんでついに動かなかった。昭和六年にいったん定年退職だったが、門弟の希望もあり引き続き講師と

して、昭和十五年に脳貧血で卒倒するまで、「一高のぬし」として異形を放った。

数々のニックネームがあったが、なかでも「ゼロ先生」が有名であった。禎は、よく一高前のソバ屋に立寄った。一高生が食べていると、何人いてもソバ代は必ず自分が払わなくてはならないと決めており、必ずそうした。あるとき、学生の一人が自分で払って出ようとしたため、禎は非常に立腹したという逸話がある。

慈母のように学生をいたわる禎先生が、授業となると一変して厳父になった。徹底して教えるのである。試験の悪いものには容赦せずゼロをつけた。明治末年に、天下の俊秀がひしめく一高のークラス四十人中、二十三人が落第するという珍事が起きた。原因は禎のドイツ語がゼロであったからだ。

採点の厳しすぎる禎が、ある年抜群の秀才を迎えた。Kといっておこう。鼻筋の通った美少年で、聡明（そつめい）でしかも鷹揚（おつよう）だ。つまり禎のみである。後年、一橋大の教授になった。

終末試験のKのドイツ語につけられた点数は「百二十点」であった。百点満点を大きくはみ出した採点に、事務職員は困惑した。相手が頑固者のゼロ先生では、うかつに注意や申し入れはできぬ。「二十点は明年に繰り越しましょうか」

と、伺いをたてた。禎は素直にうなずいた。ところがまたKの二年の終末試験に「百二十点」をつけた、というのである。事務局は、また四十点を三年に繰り越さねばならなかった。

岩元禎の巻(2)

長兄の奇癖

岩元禎(てい)を続けたい。

一高の授業中、氣にくわめ答えをする学生がいると、

「バカヤロー、何をぬかす」

と、大喝(かつ)一声に及んだ。その落雷を浴びた学生の一人に、吉田茂がいる。後年、吉田首相が国会で威勢よく

「バカヤロー」

と、やったばかりに、解散に追い込まれた。恩師・岩元禎の影響であつたろうか。

授業といえば、テキストに日本語訳でも書きこんだりしているものなら、その場でとりあげられ、破り捨てられた。だが翌日には、必ず新しいテキストを買って与えた。

禎の長男の岩元和秋(鹿大教授・財政学)にも思い出がある。

東大の学生時代、叔父の禎からテキストを見せなさい、といわれたのでそうした。禎はアンダーラインや書き込みのある甥のそれを見て、きびしくたしなめた。

・テキストというものは、聖賢がもてるすべてをこめて書かれたものである。しかるにそれをかくの如く汚すとは何事であるか。教科書はすべからず、全文暗唱すべきもので、一字一線たりとも書きこむべきでない・といつのであつた。

もう一つ和秋に忘れられない情景がある。

渋谷・青葉町の禎宅を訪れたその日は、叔父父のはごきげんであつた。かねてほしがっていた画帳が入手したのだ。それを見なさいと、半ば強制して奨められた。

和秋はパツと本のなかほどをあけた。写真帳や絵巻きを見るとき、人はなにげなくそうするものだ。禎の顔色がサツと変わり、

「本を真ん中から見るとは何事か」

と、怒鳴った。和秋はぼつぜんとした。叔父は、なぜ最初のページからていねいに見ないのだ、本というものは聖賢がもてるすべてをこめて……とやりだしたのである。

本といえば、禎は給料百円の時六十円を本代にあてた。それでも本屋のつけがたまる。その分は賞与で払ったが賞与はほとんど本代で消えるという蔵書家であつた。禎の蔵書の一部は、後年鹿児島大学の「岩元文庫」となるのであるが、そのことは稿を改めたい。

禎は好ききらいがはっきりした人物であつた。美青年を好む性癖がある。自宅を何人かの学生が訪れると、顔を見て「お前はいれ」「お前は帰れ」と、玄關で選別した。

教え子の中で、のち文豪になつた菊池寛には、

「あれはダメだ」

と、ちつともほめなかった。美男子とはほど遠かつたからではあるまいか。

本屋も洋服屋も床屋も、好きな店に限つた。一高が本郷から駒場に移つてからも、五十銭の散髪料にわざわざ円タクで本郷まで飛ばし、高い整髪についた。もっとも禎の調髪は、一学期に一回と決めていた。したがっていつも、長髪であつた。

禎の真骨頂は、「恬淡(てんだん)」にあるようだ。ドイツ語、哲学、漢学、仏教に深い学識を持ち、たやすく出版できる環境にありながら、あえてそれをしなかつた一事でもうかがえる。

昭和十六年夏、思つままにふるまつた生涯を終わつたが、後年教え子の藤田健治(元お茶の水女子大学長)らによつて、遺著として「哲学概論」が、刊行されたに過ぎなかつた。しかし一高と、一高の名物教授が回想されるときは必ずといって人々の胸によみがえってくる人物であつた。

なお、夏目漱石の「三四郎」の広田先生は、岩元禎がモデルである。禎は一高で漱石より二年後輩であつた。

岩元禎の巻(3)

潔癖壁

血に加えて、幼少からの畏敬(いけい)が兄弟を同じ性癖に追いこむことがある。岩元禎と禎の場合がそうであった。

前回に禎の好ききらいを書いた。禎が愛用の店を決めていたことであるが、四弟の禎も同様である。

東京時代、パンは一松定吉経営の一松堂のものでないといけなかった。後年、鹿児島に移ってから、洋服は日本橋の三越、ワイシャツは銀座の大和屋、靴は神奈川県学務課長時代から横浜のある店と決めていた。白足袋は日本橋の白木屋から、半ダースが「ダース」となっていて、白木屋に足型があった。

二人の、おかしな位に共通点として、異常なまでの「潔癖壁」がある。

まず禎であるが、いのちともいえる本を扱う前には、必ずシヤンプーで手を入念に洗うことであった。トイレがふるっている。おもむくに用便専用に着かえる。そして一時間はたっぷりはいってござらっしゃる。

おわると、そのころには母か女中がフロ場に用意した二つのバケツの湯を、ゆっくり使って下半身を洗うのである。フロも一時間以上かけてみがきあげるのが常であった。

禎も似ている。鹿児島市上荒田の自宅で、春先にどうかすると、金バイのやつが飛んでくる。それが手に触れると無論のことであるが、頭にとまるとそのたびごとに、髪を洗うという潔癖ぶりであった。

禎は晩年、川村純二(現・鹿児島美術館長)をともなって史蹟探訪に出た。あるとき都城駅前の旅館に泊まった。

女中がフロを告げにきたが、禎は川村にフロを奨め、野カんに湯をいっぱいもつてくるように頼んだ。その湯を洗面器にとり、からだをきれにぶき終わり、あつけにとられていた川村に、「わたしやよそのフロにはいりません」といった。

あるとき、農村にかけることになった。妻の芳に、ゆで卵子

を五つ用意させた。芳が五つも何をなさる・と聞くと、

「昼飯だ」

と答えた。芳は、おかしさがこみ上げてきた。(この人は本日の出張先でだされる農家のお昼に、最初から手をつける意思がないのだけ)

その夕刻に、帰宅した夫は胃が痛い・といった。予測どおり出張先で出された農家の昼食が不潔に思えて、ハシをとらずじまいだった。自分のゆで卵子を五つともやったため胃を悪くしたのであった。

恬淡(てんだん)という点も似ている。しかしこの点では、弟の禎のほうが、むしろ長兄の禎をしのぐ面があったように見える。

在任わずか二年四ヶ月で、かつてない名鹿児島市長といわれ、事実それだけの業績を残しながら、たった一言の陳謝ですむところを取立てせずに市長のイスをさっさと捨てたのである。気節にあふれた薩摩人であった。

ついでに、残る四兄弟にふれておこう。次兄・祐は株で一躍大金持ちになったが、晩年はまた株で無一文になった。三兄・祥は技師として若いころは磯の尚古集成館の仕事したがのち岐阜県の鉾山に關係した。

五弟・祚は園芸家の道を選んだが、仕事に熱心の余りヒソ中毒で若死にした。末弟・禄は、東大の建築科をでた。異例の若さで東大の助教授となったが、二十九歳で病死した。岩元兄弟の共通点は、学究と強い個性といえよう。

岩元禧の巻（４）

結婚

本稿の主人公を、履歴書風に紹介しておきたい。岩元禧（き）は、明治十二年生まれである。鹿児島一中から七高に進んだ。同期に東郷茂徳、石黒忠篤（政治家）池田俊彦（歴史家）らがいる。

年少から共研舎の教育を受けた。舎の教育はやはり鹿児島人らしい剛気を植えたようだが、一面ハイカラなところがあった。

會長をしていたとき、鹿児島にテニスがはいつてきた。やろうという是認派と、「バタくさい」という否認派に分かれた。岩元が是認派に手をあげたため、共研舎はテニスを始めた。

禧は一人の後輩に熱心に勧めた。その十四歳の少年は夢中になり、たちまち腕をあげたが、おかげで一中の試験には落ちた。後年、鹿児島軟庭界の名物男となった萩原秋彦である。昭和四十七年の太陽国体に軟庭の全部門で鹿児島県が優勝した源流とはいえまいか。

禧は七高から東京帝国大学法科に進み、明治四十一年卒業の年に高文に合格し、千葉県をふりだしに内務官僚のエリートコースを歩き始めた。

秋田県から神奈川県に移動したとき、大正に代わった。神奈川県の学務課長時代、三十七歳といつのに、まだ独身であつた。

もちろん理由がある。敬愛する長兄の禎殿が、四十七歳にもなつて、女など眼中にないらしく、自由気ままに独身を楽しんでござらつしやる。

禧としては、薩摩士族の美德である長幼の序によつて、長兄の結婚を心待ちにしていたのであるが、いつこつ兄者にその気配がない。内心いらいらしているところへ、従兄弟に当たる小森雄介と妻のテル子が、一枚の写真をつきつけて、これをもえという。

小森は東大、ハーバード出の政界の黒幕であり、大川周明や孫文とも交友があつた。テル子は赤星弥之助の長女で、写真の

主は、テル子の近い親戚（せき）の佐々木芳（よし）であつた。

禧は一日、その写真をもつて禎を訪れた。写真を見て、禎のほづがすっかり気に入る、

「佐々木どんの娘なら素性もいいし間違ひなか。もらえ」

と、断定した。禧もその気になつて帰郷した。七高卒業以来の鹿児島であつた。鶴鳴館で見合ひとなつた。二十二歳の佐々木芳には（やせたおひと）という印象だけが残つた。

仮祝言を挙げ、新婚旅行をかねて上京した。横浜のグランドホテルで、ひろう宴を催した。新婚時代は、日曜のたびに横浜の町を案内し、東京見物につれていつてくれた。

だから新妻の芳にとつては、十五歳も違つていながらも、新郎はやさしい、ありふれた夫に見えた。それが半年ほどして、香川県の警務部長へ転任するころから、たいへんな人物であることに気づいた。気づいたころはもう手遅れであつた。

高松の官舎に、骨董（とう）屋が出入りするようになった。刑事課長が、書画好きの岩元部長にゴマすつて、掘だしものを持ちこませる。禧は人が変わったように骨董に手を出した。

妻の芳は、夫の老母に生活費と末弟・禄に学資を送金させていた。そこへ夫の骨董で家計は赤字続きとなる。たまりかねて注意したが、

「男んすいこつに口だしすんな」

と、一言いったきりでやめなかつた。そのくせ、正月の雑煮のダシは北薩の車工ピをとり寄せるようにと厳命したりする。芳は手許不如意から、金の指輪を十五円で手離し、ようやく越年したほどであつた。こつと思つたらテコでも動かぬきびしい夫であることを知らされた。

岩元禧の巻(5)

十代目の市長へ

第九代の鹿児島市長・樺山可也は、昭和七年十月に病没した。このため助役の勝目がまた市長代理となった。

また、というのは勝目にとって三回目の市長代理であったからだ。「勝目清回顧録」によると第一回は上野篤市長(第七代)が出張の帰路、山陽本線で列車が転覆し、同伴の子息もろとも即死という惨劇にあったことだ。そのあと一ヶ月、市長代理をした。

第二回は白男川讓介市長(第八代)辞任のあと、七ヶ月もやらされたが、勝目としては最初の伊集院俊市長(第六代)に仕えてから四人の市長が、病死二人、不慮死一人、任期途中一人という不測なありかたに、薄気味悪さを感じたほどである。

昭和八年春、市会議員選挙の後、新議長の田中慶次郎ら七人の市長選挙委員が選出されて、空席の市長捜しとなった。

当時の市長選出法は、現在の直接選挙からは想像できない。法的には市会の推薦に基づき、内務大臣が任命したが、大正末年から市会で選出されるようになった。とはいっても在京の長老に、必ず伺いをたてた。

候補者は知事経験者が将官級の有力者・人物と相場が決まっていた。このときも何人かの候補者を撰び、田中議長ら四人の交渉委員が五月末上京した。

在京三州出身者の軍、政、財界人の親睦団体であった「三州クラブ」の重鎮たちに相談したところ、

「岩元禧(き)氏が最適任」

と、いつことに意見が一致した。

沖縄県知事を大正十三年にやめたあとの岩元禧は東京の青山六丁目の自宅に閑居し、当時は皇典講究所の専務理事をしていた。

交渉にきた田中議長らに、一両日考えさせてほしいといいながら、受諾のときの条件を一つだけつけた。

「市会の全会一致を希望します。一人でも反対があれば、行き

ません」

懇意にしていた大久保利武、樺山資英、床次竹二郎らの先輩に相談した。いずれも「適役」として奨めたので、岩元も決意した。六月五日に、田中議長らの交渉委員に受諾を伝えた。

鹿児島市は、六月十三日に市会を開いて岩元禧の十代目市長就任を正式に決めた。もちろん、全体一致の承認であった。年報六千円、交際費千五百円であった。市長就任を報じた鹿児島朝日新聞の青果市況欄に、<カボチャ(十貫目)市内一円二十銭、一円九十銭、吉野一円四十銭、白菜(十貫目)川辺三四五十銭、四円>といった数字が見える。月給五百円の高額がしのばれる。

故里の市長に迎えられて、岩元禧は心中期するものがあつたよつである。さつそく東京で関係官庁や先輩知己にあいさつ回りをし、精力的に動き出した。単身で鹿児島に赴任したのは6月23日午前である。その日の午後、市会で就任あいさつをした。

郷土に迎えられて光栄であり、引き受けたからには全力をあげると胸の底をのぞかせ、市政の根本を語った。

鹿児島は歴史と人情と風俗に富んできたが、中央集権のこんにちでは辺境の地という不利は免れない。それは隣保相互の精神で埋めるしかない。つまり鹿児島市という自治体の根本は同心協力であると、明快に初心を示した。

あわつた途端、議員の一人が「市長に一言」と、挙手をした。

岩元禧の巻（6）

執務

就任あいさつの岩元禧市長に、一議員は早口でまくしたてた。「新市長は知っておられるかどうか。当市会には市民同志会、市民会、中立の三派がある。いずれも市長を自派にひきこみ、市政を壟断（ろうだん）（ろっだん）せんという風説がある。市長は自口の信念でやってほしい。」

激励ともいやがらせともとれる発言であつた。いつの時代の、いずこの議会にもある複雑な底流が、鹿児島市会にもあることをのぞかせた。

だが、新市長ははなはだ無頓着のようであつた。その夜、南券の紫明館で歓迎会が開かれた。市会議員、市吏員、学校長ら七十人が参加した。

岩元はこのとき、久しぶりに帰ってきた郷土の美質として、人間の誠実さ、ことに奥さん方から女中さんにいたる女性の正直さを強調し

「やりがいがあります」

と、率直に語った。

新市長の執務が始まつた。いままでの市長とだいぶ違う。部外者にもそのことが敏感に受けとめられた。

当時、鹿児島新聞記者であつた脇田稔（南日本新聞社社長）によると、現在の市美術館にあつた木造の市庁舎の二階に上がつた瞬間に、市長の不在がわかつたという。

西側に庶務課、助役室、市長室と続いていた。庶務課にはいる。課内の空気が濃厚な密度で張りつめていると、謹厳実直そのものの岩元市長が、精力的に自室で執務しているのである。庁舎は森閑と静まり返っていた。

市長不在のときは、庶務課員が黙々として仕事を続けながらも、部屋の空気にのびやかさを感じさせたといつのである。脇田は明治新政府の大久保利通の執務ぶりが、ちょうどこのようなものではなかったか、と連想したという。

内務卿の大久保が執務のときは、下僚のしわぶき一つ聞こえ

なかつたが、不在の時は緊張感から解放されたゆるやかさが、部外者にもすぐわかつたという有名な逸話がある。

岩元市長の場合は、単に威厳の誇示という外見からきたものではない。明治四十一年に東京帝大法科大学を卒業し、千葉県をふりだしに内務官僚の豊富な経験を積んできている。島根・茨城両県の内務部長も歴任し、知事まで勤めたこの道の「プロ」である。

課長たちのあげる文書も、プロの目から見ると粗雑なものが少なくはない。いわんや不勉強な課長の文書は稚拙に映つたことである。

岩元禧は、まず首脳部の事務教育から開始したようである。欠陥文書を持つてくると、一つひとつその誤りをだし、心をこめて説く。しかし勉強不足の者には、一徹ぶりを発揮し、書類を投げ返すこともあつた。

永吉土木課長は、別の意味でよく書類を投げ返された。といふのは、若いころ共研舎で青春の血を燃やしていたころ、倉長が岩元先輩であつた。だから禧市長は、書類を投げ返す形で、後輩の永吉に奇妙な愛情を示した。

禧市長はその永吉課長と岩崎秘書を従えて、あるとき祇園之洲の官軍墓地を視察したことがある。帰って記者に語つた。

「あれはあのままにしておくべき。今日のわれわれはそう思わなくても、百年後を考えると、必ずそつすべきであり、官軍墓地はりっぱな史跡である」

見事な識見といつべきであつた。

岩元禧の巻（７）

学務課長事件

昭和八年の鹿児島市民は約十八万人である。その市民の心ある者が、新市長の人となりを知る出来ことが、着任間もなく起きた。

岩元禧が、ふしぎに思ったことは、市の教育責任者である学務課長の空席だった。それも九ヶ月を過ぎている。勝目清助役を呼んで、適任者がいないかを聞いた。

勝目は「鎌田精一」という前任者の名前を最適任者にあげ、だめの時は野村という県視学でしよう、という。そして最適任者がいつまでも復活できない、もつれきつた事情を説明した。清水小事件とついつのがあった。その前年、清水小の教頭が父兄会の寄付金問題から自殺した。

池田武吉校長も責任をとって辞職するという、教育界の不祥事だった。このとき鎌田精一学務課長が腐心して善後策を講じた。それが裏目にでた。検事局が「証拠いんめつをはかった疑いがある」と硬化したのである。

検察当局は、県に対して鎌田を辞職させるよう圧力をかけたらしい。勝目助役が県から呼ばれ、遠回しに伝えられた。「勝目回顧録」によると、勝目は司法当局の介入を唯々諾々と伝える県行政部の態度が、たいへん不満であった。

県と一戦まじえてでも鎌田課長をおろすまいと決意した。それを感激居士（こじ）の鎌田が聞いた（これ以上市に迷惑は…）自分から辞表をだした。

しかし岩元新市長が、学務課長の任命を勝目にいいだしたときは、まだ検事局の鎌田に対する不信は消えていなかった。勝目はそれを計算に入れた、次善の人として野村視学の名もあげたのである。

岩元は「三田考えていたようである。二十九歳で、県下随一の名門校といわれた山下小学校の校長に抜てきされるなど、熱血漢・鎌田精一の学務課長復活を望む声の多いことも知ったようである。」

岩元は「断」をくだした。そして検事局と県庁にあいさつに行った。そのあいさつとつのは

「学務課長が九ヶ月も欠員であるが、やはり鎌田君が最適任と信じたので任命した。このことは検事局や知事の了解を求めるべき筋合いのものではないので、市長の責任でやった」

と、いつものであった。新聞記事にもでた。「行政とは手続なり」といつ説がある。あいさつとつ名において、こついつ手続きをとられると、当時権力に満ちていた検事局や県行政当局も、文句のいいようがなかったことであろう。

新市長の「果断」に、感激を覚えた市民が多かった。無論、当の鎌田は感激した。訪れた記者に彼は

「今回ははからずも市長命令により・・・」
と、素直に喜びをのべ、「ここはみなさまの教導を・・・」と、珍しく低姿勢で語った。というのはこの男は、青年校長時代からの硬骨漢で臆せず先輩とも渡り合い、ショウチュウがはいるとあたりをけ飛ばしておどろきまくり騒ぎ回るといふ豪傑であったからだ。

この鎌田学務課長復活で、勝目もまた考えさせられた。新市長は、補佐役の自分の進言を信じ、そして進言の対象となった鎌田精一を信じて決断された。だが、それを決行するにふさわしい外部の空気はまだ整っていないかった。これからの進言には注意せねば・・・。

やがて新市長は、復活した鎌田学務課長が、仰天するような教育指示をだした。

岩元禧の巻(8)

宿台帳を焼く

学務課長に返り咲いたばかりの鎌田精一に、岩元市長はとうもない「宿題」をあてがった。小学生の夏休みの宿題をやめさせなさい・というものであった。

昭和八年七月二十六日の鹿児島朝日新聞は、学務課の方針を三段めきで報じている。その内容は、夏休み宿題は必要最小限にとどめること。同時に応分の学習だけは怠らぬよう考えること。たとえば、一ヶ月の休暇のうち、登校日を三回くらい設けて、一日講習させること。また最小限の宿題は、郷土の歴史と地理に重点を置き、それも自発的な学習を心がけさせること・であった。

人間は専門のこととなると雄弁になる者だが、子を持つ親はこと教育のこととなると、みんな「専門家」である。岩元市長の常識を打ち破った新提案に、十一小学校の先生と父母はもちろんのこと市内は賛否でわいた。

賛成論者は、市長の「夏休みぐらいいは子供をのびのび過させるべきである」という真意をそのまま歓迎した。宿題に悩み、追いかけるる愛児を見ずにすむ。ことに無学な親たちにとっては、子供からせがまれるのがつらかった。

だが、反対論者も多かった。市長の子らへのいたわりは分かるめではないが、一学期と二学期の間の、一ヶ月を宿題なしで遊ばせることは、空白が大きくなりすぎる。また子供には毎日いくらかでも机に向かわせる習慣づけとして夏休みの宿題は意味があった。それをバツサリ切られては不安を覚える。

反対論には、今日でいう教育ママ的な母親たちが多く、また反対論の父兄は論客が少なくなかった。大勢は反対論が強かったようである。

そのころ天保山小学校で先生たちの集まりがあった。市長はでかけていき、夏休みの宿題帳がいかに形式的であり、宿題の dashikata がいかに形骸化しているかを指摘し、

「魂のこもっていない宿題帳ではいけない。みなさんが鹿児島

の実状にあったものを作るべきである」

と、強調した。

それに対して、先生たちが反発した。いったい市長は、われわれの日常をご存知でしょうか。授業や授業準備や研究のために、いつも帰りが夕刻になるわれわれの、どこに宿題帳をつくる時間があるといわれるか――。

表情に真剣さがあふれている。教育に全力をそそいでいるそれらの先生たちの抗議には、さすがの岩元も返すことがなかったようである。

しかし岩元禧は断行した。どうも被害者のなまなましい体験が、そつさせたのではなからうかというのが、禧の次男の紀彦(旭相互銀行常務)の、今日の迷懷である。

というのは東京時代、小学生の紀彦は夏休みになると宿題ことに工作を多くたされた。二学期が近づく、その宿題を父と兄・和秋に割り当ててやってもらったものだ。その意味で、父は被害者意識が身にしてみていたはずだというのである。

七月末、岩元市長はできあがっていた宿題帳を、学校ごとに焼かせた。この時期、鹿児島は炎帝がその存在を誇示される気節だ。小学校の焼却釜(がま)は、炎天下にいつまでも煙をのぼらせていたことであろう。

反響は全国に広がった。教育学者の霜田静志を始め、「よくそやられた」という賛意や激励の手紙が、市にあてて舞い込んだ。

岩元禧の巻（９）

ハダシ禁止令

薩摩人の特質に、「剛気」な半面、奇妙な「羞恥（しゅうち）」がある。巨大漢の西郷隆盛が陸軍大将、近衛総督、参議という天下最大の顯職（けんしょく）にありながら、ことに初対面の人や身分の低い者には、婦女子のような「はにかみ」をもって人に接したことは有名である。

もともと質朴をむねとした、土道の伝統がある。「弱いものをいじめるな」というのは、郷中教育の三原則のひとつだ。いわゆる出世のたびに、尊大にふるまっていないか・という自戒もある。

岩元禧にも、この「はじらい」がある。ハイカラではあるが、非常な照れ屋さんであった。華美なことをきらった。

香川県警察部長から、島根県内務部長に栄転した大正七年のことであった。内務部長といえば、副知事も総務部長もなかった戦前の、知事につぐ地位である。

島根県から赴任の日時を何回も照会してきたが、岩元は「必要なし」と応じさせない。家族そろって出発し、夏の夕刻、穴道湖畔の玉造に着いた。松江の町はすぐ近くだ。

連絡してないから迎えの車もない。しかし禧は駅から温泉まで歩いた。妻の芳は乳児を抱き幼児の手を引いて従ったが、あんな重かったことはない・と、いまでも述懐する。

禧は人に聞いて最上の旅館に入った。しかし予約でいっぱいだと断られた。やむなくほかに旅館を捜して落ち着いた。一息いれていると島根県庁の役人が恐縮して迎えにきた。ほうぼう捜していたらしい。一家がその旅館をでて案内されたのは、最初に断られた旅館であった。禧という人物は、赴任の連絡を仰々しく感じ、車の準備を華麗に感じる照れ屋であった。

だから後年鴨池動物園に、派手な洋風の花壇ができたとき、岩元市長はすぐに園長の岩崎厳彦を呼んだ。岩崎はほめられるものと思っていたらしいが、禧は華麗に過ぎると雷を落とした。

また岩元禧における人間性のおもしろさは、「剛気」と「礼讓」

とが見事に同居していたことである。剛気に見えながらも実体が「蛮風」であるものを、最もきらった。

愛憎たちへは、ほとんど干渉しなかったが、帽子を斜めやあみだにかぶっていると、必ず注意した。無論、自分の服装は端正であった。着物のときはかまをつけ、タビはいつも真っ白であった。

岩元市長の鎌田学務課長に対する重要指示二号は、「はだしの追放」である。当時市内の小学生たちは、普通校内でハダシだった。だから朝の朝礼は苦手であった。足裏が痛く、校長先生の訓話の耳に入らぬ子供が少なくなかった。

当時は軍国主義が日本列島におおいかぶさり、しかも鹿児島は西南戦争からまだ五十余年しかたっていない。尚武の気風は小学生時代からのハダシの励行をもって人間教育としていた。

岩元禧には、これが蛮風以外の何ものにも映らなかった。「校庭でもズックをはくよう」に指示させた。当然のことながら反对者がでた。

「こんどの市長さんは貴族趣味じゃ」

と、冷笑する者もいた。岩元禧は決して弁解しなかった。後年このことについて人に、蛮風のほかに、子供たちだけハダシをさせ、自分たちはしない先生方を見て、不公平きわまると思うた・ともらしている。

岩元禧の巻（10）

酒とじる」

物事に徹する、ために中途半端を排す・というのが、岩元禧の生涯における、きわだった事象であろう。飲食にそれがよく現れた。

シヨウチュウが好きであった。短い沖縄県知事時代を偲（し）の（ん）でか、泡盛も好んだ。夕食、シヨウチュウか泡盛をやるが、人と違ったことは、晩酌をしながら食事をし、「ご飯を食べながらそれを飲むことであつた。しかもシヨウチュウや泡盛は生（き）のままで飲む。

戦後でこそ、シヨウチュウは酒精二十五度のものが多いが、戦前はほとんど三十五度だ。岩元禧は、決して水で割らない。生のままであつた。それでいて、二刀流である。

岩元家の家族で、忘れられぬエピソードがある。島根県内務部長時代のことだ。冬の夜、予算編成の残業が、官舎の隣家で行われた。禧は妻の芳に命じて、夜食にすることを用意させた。

雪の降りしきるなかを、女中が鍋を運んで行き、残業の吏員にすることをいつで回つた。岩元内務部長は味見に及んだが、苦い顔をして、「待ちなさい」と、みんなにいった。

せっかく配つた茶わんのしるこを全部鍋にもどさせ、女中を通じて妻をたしなめた。「芳に、甘味がたらんといいなさい」女中は、さらに砂糖をいれ直したしるこを運び直さねばならなかつた。甘いものも、徹底して甘くないと承服できない性癖であつた。

この人物の、いまひとつ落とせぬ事象は、いつも遠い将来を見て仕事をした点である。岩元が市長に就任した昭和八年の鹿児島市は、現在の鹿大水産学部南側から、騎射場電停、大学内北部、武岡下の西郷家裏などを境として、「中郡子村」「西武田村」に接していた。

また北部はいまの玉竜高の校門あたりから、稲荷、鼓川両町の山々を境にし、海岸線は重富荘の隣から「吉野村」であつた。

当然、鹿児島市の将来のためには、この三村は合併されねばな

らない。

しかし市町村合併は簡単でない。岩元は市長就任と同時に、この三村合併に精力的に取り組み、翌九年八月一日には見事、合同を実現させた。天保山橋の架橋も、かなりの未来風景を描いての労作であるが、人材養成の面にもそれがにじみでている。

昭和八九年は、日本中が不況に見舞われていた。社会大衆党は飢える農家のために、全国的な飯米要求闘争を展開し、東京市の交通労働者一万二千人は、首切り反対のストを敢行する・といった事態であつた。こういつ時代であるから、大学出、それも帝大を出た連中までが就職難にあえいだ。

岩元市長は、何十年か先の鹿児島のことを思ったよつである。役所も採用を手控える不況のときこそ、人材養成が必要だと決意した。それまで鹿児島市は帝大出身を採用していない。初任給が安いためもあつて応募しない。岩元がまず着手したことは、帝大卒厚遇のための給与改定であつた。

つぎに各地の帝大卒業予定者と、卒業はしたが不本意に過している郷土出身者に帰郷就職を呼びかけた。上田太郎（故人・にち県民生部長）内倉良文（のち鹿児島市助役）春山秀雄（旭相互銀行副社長）などがそのときの応募組である。

帝大出身者の一人一人に、岩元はテーマを与え、一ヶ月以内にレポートをだすように教育した。上田太郎がもらったテーマは「将来の鹿児島観光政策」であつた。後年、上田はそのときの勉強が非常に役立ったと述懐している。

岩元禧の巻（11）

築港で喧嘩

昭和9年の始めときの鹿児島県知事・市村慶三と鹿児島市長・岩元禧は、築港問題をめぐって大喧嘩（けんか）をやらかった。

両者はどうも不仲のようだった。岩元は大正12年に知事（沖縄県）を経験しており、思ったたら譲らぬ頑質の持ち主であるが、市村の方もこれまで癪癖（かんべき）が強く、いわゆる「両雄並びたたず」であった。

余談になるが、大阪府出身の市村は離島民には温情をそそぎよく奄美に足を運んだ。昭和八年には大島産業振興5年計画をたて、「大島知事」の異名をとったほどである。

鹿児島県と市の対立になった鹿児島築港問題は、大正一二年に改修工事に着手し、昭和九年の夏には完工の運びになっていた。紛争の焦点は、のちの中央市場に關係した築町から州崎町につらなる岸壁設備などの追加工事にあった。

二十六万円のこの追加分を、国は負担しないという。市としては将来の発展から見て欠かせない。県に何回もかけ合ったが、県も負担できないという態度であった。市はやむなく独力で施行することにした。問題は管理権と使用権である。

当時はまだ港湾法がない。管理権は県がもち、「勝目清回顧録」によると、「養老院で退職間近い者」が港務所長になっていて、いろんな港湾使用料をとりたてていた。それがまた他県に比べて割高なため、船は鹿児島港を「敬遠」して他港に陸揚げする。だから市としては、単独で追加工事をやりぬいたからには、将来の繁栄を考えて完工後の管理運営について、県から一札とっておく必要がある。その交渉を始めたら、途端に県はサザエのようにフタをとじて交渉をしぶった。あげくの果ては、

「この追加工事は県で処理する」

と、高飛車にでたのである。市村知事と岩元市長の、正面衝突となった。ところがどういうわけか、知事は市長を避けた。

市村にとって岩元は内務省も知事も先輩であり、また筋論とし

ても市のやり方が通っていたからである。

市は第一助役の勝目清が折衝に当たった。勝目たちは知事の「わるがしこいやり方」を警戒し、一方的な出方に備え、それまでの県との往復文書を印刷して、満を持していた。

昭和九年三月十九日、県は声明を発表した。市が予想したように、世間には「県に向かつてだだをこねている鹿児島市」の印象を与えた。岩元禧は「生々の旗堂々の陣」の人柄である。むすこ達の友人が、自分の勝手口から入ってくるのを発見するたびに、

「男はいつも堂々とふるまうもの」

と、たしなめ改めて玄關から入らせた。

市村の一方的な声明に、岩元も準備した印刷物をいっせいに公表させた。翌日の郷土新聞は、市側の資料をほぼ一頁も費やして報道した。市民大会が計画され、市議や会議所議員も知事にかけ合うなど騒然となった。

結局、坂口県会議長が「時の氏神」となり、あっせん工作が成功し、四月二日知事官舎で、市村知事と岩元市長の会見となり解決した。条件は追加工事を含めた総工費九十九万余円のうち、県が四十四万六千余円、市が五十四万五千余円を分担すること。中央卸売市場の敷地は無償で市が使う。市が提唱していた港湾運営民主化のための「港湾管理委員会」を新設する——などであった。

十二年がかりの鹿児島港修復工事の完工式は、同年五月二十四日めでたくあげられた。二人の頑固者も、上きげんであった。

岩元禧の巻（12）

よかもん好き

「よかもん好き」というのが、岩元禧にびたりの評言であらう。洋服、ワイシャツ、クツと、すべて東京・横浜のデパートや好みの店で、別あつらえした。義弟の佐々木申吉（国際ロータリークラブ鹿児島事務局長）は、いつも岩元から叱（しか）られた。

叱られても、よく出入りした。魂胆がある。姉の夫である禧は、至極気がよい。身内のものを、教育の意味で叱り、たしなめると、何かくれるのである。佐々木はよく洋服をもらった。まだ十分着れるのを、惜気もなくくれるのである。佐々木はひところ、禧からもらった洋服で暮らした時代をもっていた。洋服は叱られ賃である・と解していた。

禧の乗る汽車は、いつも最上等であつた。上京の時は、いくら財布が窮屈でも、東京駅前のステーションホテルに宿泊した。「役人という者は、もらっただけ使つもの」というのが禧の基本的な発想であつた。だから、二等の旅費を支給されていながら、二等で節約する種族を、極度にきらった。何事でも「よりよきもの」を欲した。

しかしながら、やたらにぜいたくをしたのではない。不必要な出費はつつしんだ。佐々木がこんにちまで、頭にこびりついている禧の教えに、

「十円するもんは三度考えよ」

と、いつのがあつた。百円の品物は、おいそれとは買えないので、いやでも深く吟味する。十円だと、吟味がどうしてもおろそかになる。だから低額の買い物はつい粗略になる。そこを熟考してもむだな力ネは使つな・というのである。「よいものは長持ちがする」の処世術は、執務面にもよく現れた。

岩元市長が、のどかな調子で勝目助役に、「だっきしょ（落花生）をやんそやあ」

と、いいだすことがあつた。昼間のそれは、問題がなかった。

無類の落花生好きの市長がそれをたべたいまでのことだ。夜、

予算査定るとき、それがでると緊張した。買う量によって、残業かのびるのを覚悟せねばならぬからである。それほど仕事に徹した。

平瀬実武（県議）によると、岩元禧という人物は、計画をたて始めると、幾通りもの考えをめぐらし、それを積み重ねていく・多層思考の持ち主であつた。そして常に最善をめざしたといつ。

鹿児島市に飛行場を設置しようという計画は、昭和七年七月七日に県と市で打ち合わせが行われて盛りあがつた。翌年、岩元市長が就任してから、平瀬市議が動議を提出したとき、市長は、

「やんそやあ」

と、いった。落花生を買いに走らせる気やすさであつたが、行動に移るとめざましい。

それまでは、滑走路五百^{メートル}、谷山の小松原海岸と新川尻が候補地であつたが、岩元は同じ造るならと、例の「よかもん好き」を発揮し鴨池に、当時としては広大すぎる面積をとつてついに実現させた。

前回の中央卸売市場も同様である。日本で本格的な中央市場を造つたのは京都市が最初だ。岩元はその市場開設者であり、初代場長であつた大野勇という最高権威を招いて、鹿児島市の中央卸売市場を造つた。大野は期待にこたえて、当時、日本で最も地方都市にふさわしい機能的な市場を造つた。開設の初日から成功した。

数年前、高知市名誉市民の大野勇は来鹿した。勝目名誉市民の案内で、唐湊墓地に眠る岩元禧の墓にもうで、墓前で恩顧を想起し、何事かを呼びながら落涙しはだったといつ。

岩元禧の巻（13）

大演習記念出版

戦後の日本は、各府県の回り持ちで国民体育大会が開かれ、天皇や皇后とおそろいで開催地を平服で回られる。これが戦前は、陸軍の特別大演習であった。大元帥の天皇が軍服で統監され、そのあと地方を行幸された。

戦前戦後を問わず秋になると、黄金の穂波が揺れ、または刈田の農村を天皇の行列が長々と続くのは、最も日本的な風景であった。こういう形で天皇と日本人とのきずなは、しっかりと結ばれていたようである。

昭和十年十一月の陸軍特別大演習と地方行幸は、鹿児島、宮崎両県下で、十一日間にわたって繰り広げられた。関係者の心労は筆舌につくせぬものであった。

大演習の発表は、前年の十二月末にあった。鹿児島県と、おひざもとの市は特に緊張した。一月四日には陸軍参謀本部から連絡がきたため、正月も返上で準備にかかった。

鹿児島市は、一月末に勝目第一助役が熊本市の視察に向かった。熊本は昭和六年に大演習を経験しているからである。

熊本市役所の予算を調べているうちに、大演習予算の残りでも、市参事会の了解をえて、自動車を買ったことを知った。当時、市役所の乗用車というのは珍しい。

勝目はこの自動車購入が印象に残り、帰任してから岩元市長・黒江第二助役、伊集院収入役等に報告のとき、車のことを語った。これがのちに、鹿児島市政混乱の「種火」となるが、そのことは後述したい。

大演習時に、地方行幸される市町は、それぞれの土地の歴史などを編集して、献上するのが恒例になっていた。鹿児島市には、明治維新をやりとげ、日清・日露を勝利に導いた人材の生誕地という自負があり、それ以前の濃密な歴史もある。しかも岩元禧という、歴史に見識をもった市長がいる。

市では専門家を動員して編集に着手した。代表作が「薩藩の文化」であった。お国自慢を避け、薩摩藩がどのように学問と

科学技術を取り入れて富国強兵を形づくったかを、実証的に編んだ労作であった。

また、旧藩時代の鹿児島城下の細密地図をまとめた「薩藩沿革地図」と、島津斉彬の伝記を、さらには鹿児島史談会の手で「神代三山陵」という四種類を出版したのである。

「勝目清回顧録」によると、これらの構想はほとんど岩元市長によったものだとある。専門家顔負けの企画編集であるが、あきれるのは製本の内容である。

活字の種類から組み版、写真や装画、紙質、装幀（てい）など、製本のいっさいを岩元禧は、それこそなめるように自分の考えで指示したというのである。

こんにち「薩藩沿革地図」を見ても、これほどの表装や印刷が、三七年前とは思えぬ見事なできばえである。

勝目回顧録は、岩元市長の美術眼に驚嘆しているが、それは当然のことといえる。岩元禧が、香川県警務部長時代に、晝画骨董に熱中したことは前に書いたが、大正十年に茨城県内務部長に赴任したとき、歴史的な画人たちに出会ったのである。

郷里の水戸に帰っていた横山大観であり、その周囲にいた下村観山、菱田春草ら日本画の先達であった。大観が文展にあきたらず院展を起こしたところであった。岩元禧は、大観らの擁護役となった。交際が深まる過程で、禧の審美眼はなみなみならぬ確かさを加えていって、それが大演習記念出版に結実したものと見えよつ。

岩元禧の巻（14）

新市庁舎事件

鹿児島市政にとって、昭和十一年の前期ほど混乱をきわめた年はなかつた。

苦渋を予兆するような事件は、まだトソ気分^{トソ気分}に市民が浮かっていた一月四日に発生した。夜九時半ごろ、武町の宮田通り踏切で、下り列車と市営バスが衝突。さらに他のバスにと、二重衝突事故が突発し、重軽傷七人をだした。

たまたまその朝、北薩の阿久根でも列車とトラックが衝突し、一人即死、二人重傷の惨事があったため、鹿児島^{鹿児島}の地元新聞は二つの交通事故を報じる号外をだしたほどである。

その前後、市会議員の大多数がひそかに密議をはかったふしがある。岩元市長の独断専行が過ぎる。ひとつ、大きくて痛い灸（きゅう）をすえねば・・・というわけである。

市会における攻撃材料として、まず市庁舎問題があった。

「勝目清回顧録」によると、いまの鹿児島市庁舎の新築工事計画にかかったのは、昭和九年二月三日であるという。

当時の市庁舎は、いまの美術館付近にあった。木造二階建てで老朽がひどく暗かった。改築は歴代市長の課題であったが、財源難というより、政府の緊縮財政のために実現しなかった。

岩元市長になって、新築決行となった。最初の具体的協議が二月三日というわけである。市公会堂に、市長、勝目第一、黒江第二助役、永吉土木課長、玉利建築技手の五人が集まって協議した。

最初は延べ五九四〇平方メートル（一八〇〇坪）経費約四十二万円、三年計画というものであった。その前の、つまり歴代市長の案は延べ二二一〇平方メートル（七〇〇坪）であったが、「よかもんすき」で「拡大癖」のある岩元市長が、「百年後の実務と鑑賞に耐えるものをつくらねば」

という方針で、壮大な計画になった。さらに計画を練っているうちに、禧の夢はますます広がり、最終的には七二六〇平方メートル（二二〇〇坪）という、当時としては画期的な構想になった。

岩元市長の市庁舎新築への取り組み方は、ただならぬものがあった。電車道との関連において、土台の高さをどうするか。背景の城山の緑と調和するにはどういつ色がよいか。また城山からながめた場合、裏側が貧弱な感じを与えないためにはどういつ形がよいか。

そのほか玄関車寄せの装飾に、郷土の特色を生かした薩摩焼きの陶板まで考えるなど、準備は順調に進んだ。設計や監督に山形屋の新見滋郎の協力をえ、その年の二月末に入札した。中央大手七社の指名入札であったが、大倉土木ズズ（大成建設）が、四十六万七千八百余円で落札した。

これが建築業者と市会議員の一部に力チンときた。大手だけの指名で、地元業者ははずされる・・・という情報が流れたとき、建設業者の中には有力市議を通して、岩元市長に打診した。

禧は平然とした態度で、

「百年の後まで残る鹿児島^{鹿児島}の代表的な近代建築を、やりとげる業者が地元^{地元}にいますか」

と、歯に衣（きぬ）をきせず^{歯に衣をきせず}にいった。それが建築業者を硬化させた。有志大会を開いて岩元市長への警告文をつくり、市長につきつける一幕もあった。

この動きに、かねて一矢むくいたい市議たちが、一月十日の市会を前に、綿密な作戦をたてたようであった。

岩元禧の巻（15）

混乱市会幕開く

関ヶ原の天下分け目の合戦は、たった午前中だけの短時間で勝負がついている。

昭和十一年前半の、鹿児島市政を空前の混乱に追いこんだ直接の原因は、一月十日の市会の、それも短時間な午後のやりとりであった。

前触れがないでもなかった。前日の鹿児島朝日新聞・夕刊は主筆の鰐坂南水が短評欄に市庁舎問題をとりあげた。

まず岩元市長に触れ、地元の建築業者を指名入札から排除するという中央依存的な態度には賛同できぬ・と“一太刀”あびせ、返す“一太刀”を地元業者に向け、くしかしてわが鹿児島県の請負師諸君も反省すべきである。結局、こういうことになったもの、請負師自身に実力が乏しいからである……

と、ケンカ両成敗でしめくくっている。

問題の一月十日、鹿児島朝日新聞は朝刊で紛糾を告げるであろう市会の予想記事を書いた。文脈は岩元市長の独断を追求する市議の代弁であった。そして
＜午後二時からの緊急質問しだいでは、問題が問題だけに、ひいては岩元市長の面目問題にまで発展するであろう＞
と、予告していた。

当日の市会はいつもの公会堂で午後一時から開催されたが、傍聴席も満員になった。

前之園喜一郎議員が、市庁舎請負で市政に暗黒あり——と、問題を正面に据えて正政法に出た。新名真蔵議員が、

「請負問題の前に、市会の建築委員会はなぜ市当局と十分に話し合わなかったのか」

と、市長弾劾（がい）の伏線を張った。建設委員長の前之園議員は、えたりとばかりに同僚議員に向かい、

「にゅうきつについては、市長から相談を受けるものと信念をもって待っていたが、ついになかった」

と、無視されたことについて、激烈な調子でぶちあげた。新議員も加わって、岩元市長の横暴を鳴らし、

「岩元市政は明朗を欠く」

と、つめよったのである。

答弁にたった岩元禧は、

「明朗に欠くといわれるが、私は明るい市政をむねとしている……」

と、はねかえしながら、理路整然と語った。

市庁舎の新築は、長い将来のことを考えて、最も確実に造りあげることが根本である。またことは専門的なことである。そこで国会議事堂に関係している大蔵省に、業者の選定方を依頼しておき、設計完成と同時に推挙してもらった。無論、地元の業者も考えたが、結局、誰が見ても常識的に経験豊富な東京、大阪の業者に落ちつかざるをえなかった——と、いう答弁であった。

新議員はさらにくだがったが、どう攻めてみても無理なことであった。岩元市長はそのとき、これ以上説明も弁解もしていないが、大倉土木が落札したときは、工事担当者と責任者の経歴などを調べさせて、さらに入念を期している。

市会議員の投じた“爆弾”は不発に終わったかに見えた。ところが相良弘議員が、さりげない調子で、

「大演習予算の剰余金でもって、二台の自動車を購入したか」と、質した。これがかつてない名市長といわれた岩元禧を辞任に追いこむ“導火線”となった。

岩元禧の巻（16）

二台の自動車

相良議員の「自動車を二台買ったのは事実か」というタタミかけに、岩元市長は

「大演習に使った自動車を、年内に処分するという向きがあったから、その際その方が得策と考えて買った」

と、率直に答えた。相良は急追した。

「大演習の予算を使つたらば、一応市会にはかるのが当然と思うがどうか」

ここで田中議長は休憩を宣した。

大演習の自動車には裏話がある。鹿児島市には、オンボロの乗用車が一台しかなかった。十一月十二日の、都城で行われる晴れの観兵式に、鹿児島市長が使えるようなものではない。

そこで林田熊一から自動車を二台ほど借りたのである。一代には岩元市長と、珍しく妻の芳（よし）の夫妻で使った。そのことが（いつか市長の鼻を折つてやる）とねらう連中に、

「公私混交もはなはだし」

と、格好の攻撃材料を与えた。現在鹿児島市鴨池町の長男・和秋宅に健康な日々を送っている芳は、三十六年前のハブニングについてこう語っている。

当時の市長夫人は、愛国婦人会の鹿児島市支部長であり、県の副会長であった。その職責からして都城の観兵式に参列せねばならなかったため、夫でなしに第一助役の勝目清に相談した。

勝目は市長の車で行ってほしいと指示した。この過程でもわかるように、芳は公用として参加し、事務手続きも正式にとった。なお、観兵式終了後は、車二台で関の尾の滝を見学にいった。一台に市長夫妻が、一台に市会議員が三、四人乗った。そのなかに、市会で自動車購入問題を追及された議員もおられたはず——と、芳は回想するのである。

だが、芳の実弟の佐々木申吉（国際ロータリークラブ鹿児島事務局長）は、今でも当時のことを残念がる。

というのは義兄の岩元禧の日常があまりにも清廉であったか

らだ。大演習前のたった一台の乗用車を、岩元市長はめったに使わず、ことに妻の芳を同乗させたことは一度もなかった。市電を愛用した人であった。

あるとき、義兄に私事のまじった用件を頼んだことがある。禧は義兄という立場でなく、鹿児島市長という立場で、それを冷酷なまでにはなつけた。佐々木はそれが身にしてみても、以後義兄には私用はもとより私用と見えるような依頼は、いっさいしなかった。

だから大演習に、姉の芳が事実、愛国婦人会鹿児島市支部長としての公用出張であったが、世間の誤解を招かないためにも別の車に乗るか他の方法をとるべきであった——と、口惜しがるのである。

いつの時代にも、皮相の現象でしかものを見ない大衆はいる。鹿児島市民の一部にも当時、

「ハイカラ好みの市長ごんは、ピカピカの車に奥つさあを乗せて、都城までドライブしやった」

と、いかにも公私混交のように、いいふうす者がいた。そういう大衆感情を市会議員の市長追及派は、巧みに利用した。さらにはいえば岩元禧という人物が、決して「弁解」をしない性癖であることを知っていたので、この「二台の自動車」を追跡すれば、さすがの強情市長の鼻っ柱も折れざるをえまい——という計算だったようだ。

市会は、午後四時三十五分再開された。

違法か合法か

再開された市会に、岩元市長は「二台の車」のいきさつを説明した。

「自動車購入は、市会の協議会にもはかつていた。乗用車を一台、散水車を一台というのが、協議会の空気であった。散水車は市民の要望も強く、こんどそれを一台買ったわけである。

乗用車と散水車の購入について、自分は市会の議決を必要とは思わぬ。協議会の承認でよいと思っていた。しかしその協議会を開かなかったことは、自分としても早まった」

——すまなかったとか、悪かったとか、あやまっていなかったのである。「早まった」と、一種的情景描写なのである。

相良議員は「私は市長と全然意見が違つ」

として、議決無視を強調した。自動車購入は、更正予算で執行すべき重大事である。しかも大演習前ならまだしも、終了後に市会の議決なしにこの市長専断は明らかに違法である——という論旨であった。

マイカーを含めた車両で日本列島の“毛細管”を形づくっている一九七〇年代から見れば、二台の自動車購入で、市会が紛糾する図は、ほほえましく映る。けれども二台の自動車の値段八千円は、当時鹿児島県で最高のサラリーであった岩元市長の年俸六千円、交際費千五百円、しめて七千五百円に匹敵する高額であり、自動車そのものが、特権階級のゼイタク品視された時代であった。

相良の異見に、岩元は説明を続ける。

予算の費目の目と云うものは、と、長年の内務官僚、そして沖縄県知事までした行政官のプロとしての豊富な体験からでている。

「予算の費目の目は、予算面にあがっていない物であっても、場合によっては購入することがある。しかしながら自動車購入については、問題が大きいたので協議会にはかった。したがって違法ではないと信じる。しかも当時の協議会のふん囲気は、改

めて協議会を開くほどの状態ではなかった」

と、いった。しかしそのあと神妙に、

「協議会を正式に開いて承認を求めなかったのは、われわれの手落ちであった」

と、加えた。岩元禧が「われわれ」と複数ながら、初めてそしてこれが最後になったのであるが、唯一の譲歩であり、詫言（わびごと）であった。このまれなる頑質の人物には、珍しい一言であった。

もっとも筆者には、市長の補佐役であった勝目第一、黒江第二助役らを含めた部下への、自戒の教訓とも受けとれるのである。

このように協議会が事前に関係していた内情を示され、また珍しく落度を認められると、追及派としては市長の言を容認するが、でなければ金切り声で「議決機関無視論」を叫び続けるしかなかった。

江口議員が、後者にしたがって「予算運用をなんと心得るか」といったあと、宅間議員は「決議案を早くだせ」と催促した。田中議長は、ここで決議案がでは、たいへんなことになる」と判断した。それを防ぐには、時間をかせぐことが、なんとしても効果的であり、何人をも傷つけない措置である。

きよつはここで散会し、明日また再開しようとはかったが、緒方議員が、「断じてあすに延引すべきでない」といって、自動車問題のほかに鴨池、脇田間の電車均一の値下げ問題、市庁舎建築問題など、最近の市長の態度は全く独断専行に終始し、目に余るものがある——とし、決議案を即刻はかれと迫った。

田中議長は万策つきたようである。

岩元禧の巻（18）

三十一人の決議

圧倒的多勢のため、田中議長は三十一人から提出されていた決議案の説明を、これ以上押さえることは出来なかった。

前之園議員が代表して登壇した。戦後、参議院議員にも当選した弁護士で、歌誌「創作」の同人であり、谷山慈眼寺公園内に歌碑も残っている人物である。

「——自動車問題は、実質的にも形式的にもいけないと思う。この予算の財源は、大演習の寄付と税金によった、市民の赤誠である。したがって市民の了解をつるべき性質のものである」

と、問題の急所を巧みにつき、三十一人の連署の決議案を朗読した。

＜本会は、鹿児島市が林田某より購入した乗用車は、法規に違反するものにつき、市会はこのを認めず＞

剛気な岩元市長の表情がひきしまったことであろう。市民の「赤誠」という、天皇に関連つけた追及が痛かった。予算執行上の合法か違法かは、前夜まで法規を洗い直して見たらしいが決定的に違法という線はでない。

普通であればほとんど問題にならないが、大演習の寄付、つまり「民草の赤誠」といっいかたになると、特別な感情を帯びて迫ってくる

そして決定的なことは、二三人を除いた市議の九割が、自分の行く手に立ちふさがった事実である。岩元禧は、自動車購入に名を借りた、市長への不信任と受けとった。もつ一言も発しなかった。

帰宅した岩元は、その夜家族を呼び集め、「全員に近い市会から、不信任案が出た。市長をやめることにする。男は引きがわが大事であることは、かねてからいつてある通りだ」

と、申しわたした。そして田中議長に電話で辞意を伝え、翌十一日朝、病氣療養中の勝目第一助役あてに、辞表を届けさせた。

市場辞意表明——の報は、鹿児島市内をまたたくまに走った。

同日、つまり昭和十一年一月十一日午後一時から、事態収拾の

ための緊急市会協議会が開かれることになった。

田中議長は朝から市議の説得工作にかかった。市議たちは市長辞意表明という予期せぬ反応の強さに興奮を覚え、またその辞意がたぶんにはズスチュアに見えたりし、とても応じそうになかった。

定刻の二時には、伝えきいた市民たちが押しかけ、警官十数人が交通整理に当たるほどであった。協議会が始まると、満員の傍聴席から、興奮した聴衆が、
「チエスト！」

と、叫んだりした。

田中議長は市長慰留のため、「市会の総意」ということで、市長に陳謝を求め、それによって問題を白紙に返すことを提案した。

平瀬実武議員（戦後・鹿児島市長）ら数人が賛成したが、大勢は反対である。賛成の松田議員と、反対の宮原議員の間には、つかみかからんばかりの険悪な一幕もあった。

話がまとまらぬまま、協議会は打ち切られたが、閉会のころには反対派の態度はかなりなごんでいた。頑固市長の陳謝する情景を想像し、勝利感にひたつた者が多かったようだ。

田中議長はその足で、市長宅を訪れて慰留につとめた。岩元は好意を謝したあと、

「法規違反の決議案は、明らかに事実上の不信任案である」

と、議会が決議案を白紙に戻す以外方法はなく、陳謝などには応ぜられないといい放った。

辞任確定

市長辞意表明の波紋は、さらに広がった。

市会は一月十三日に辞表ができて、保留にしておき、代表者が市長慰留につとめ、応じない場合に正式受理と態度をきめた。

商工会議所も緊急役員会を開き、久米田会頭、稲松・池畑副会頭らが調停工作にのりだした。

市民の受けとめかたは二様にわかれた。鹿児島のような貧乏世帯では、現在の一台でよい乗用車を、新しく二台も買つとはぜいたく過ぎるという硬派と、いや岩元市長はいくたの問題を解決された。その人をこの程度でやめさせるのは将来に問題を残す。市会もそこを考えよ。独断専行の市長も、こんなは注意されるだろうという軟派であつた。

市民の有志の間には、岩元市長の慰留のための演説会を開くなど市民運動が起きた。

市会の中にも、決議案は単に自動車購入の法規違反をとがめただけで、市長の不信任を意味しない——という軟論がでてきた。田中議長は、この動きに力を得たようである。

十八日に勝目助役から提出された岩元市長の辞任をめぐる、最終市会が開かれたのは、十日後の二十七日のことである。朝から協議会でもんだが結論はですに午後続開し、条件付きでいま一度留任勧告することに全会一致で決めた。

条件というのは、自動車二台購入のうち、一台は乗用車、一台は散水車として提案し直せば市会もこれを承認し、決議案を撤回するというもので、市長と市会の双方の顔がたつ苦心作であつた。

午後二時半、田中議長は全員を代表し、上荒田町の市長宅を訪問して、市会が大幅に譲歩した条件を示し、最後の慰留勧告につとめた。しかし岩元の辞意は堅かつた。男子たるもの、一言発した以上、それをひるがえすことはすべきでなく、人間は出所進退をきれいに——というのが、愛怠たちへの日常の教え

でもあつた。

失意の田中議長は、公会堂に直行した。市長の辞意を正式に受理するための市会が開かれたのは午後七時五十分である。

その市会で、終始市長擁護につとめた平瀬実武議員から動議が提出された。いま一度、岩元市長が辞意を撤回するよう方策を講ずべきである。なんとすれば——と、平瀬はその理由を語り始めた。

翌朝の郷土新聞は、この平瀬演説を大きく報じている。岩元禧という政治家の実像が、公の場で端的に語られた唯一の例であると筆者には思えるのである。平瀬はいう。

<昭和八年四月の市会で、満場一致推挙した市長である。その足らざる所はわれわれも補い、明朗な十八万市民のための市政が推進されるべきなのに、今回の質問や決議案は協調の精神がいささかもないことを悲しむ。市長は在任わずか二年余り。その間国際飛行場を始めとし・・・>

と、業績を紹介、人格、識見をたたえ

<歴代市長のなかで、これほどの名市長は見なかったものである>

と評価したあと、一転して妥協性のない頑質に触れたあと、<潔白にして非妥協的な人格者であればこそ、各都市に見るような汚職や不正事件がなかったのである。この市長を失つならば最大の損失である。いま一度辞表撤回を・・・>

この平瀬動議に、皆吉議員が一人賛成しただけであつた。その瞬間、岩元市長の辞任が確定した。

岩元禧の巻（20）

男子の心境

岩元市長は、書画を愛していた。香川県の警察部長時代、骨董（とうとう）に没入したことは前に書いた。

茨城県内務部長時代には、横山大観、下村観山、菱田春草らと知り合い、その擁護者の役割を果たしたことも書いた。

そつした日本画の第一人者達の交友の過程で、大観などから作品をもらつたが、ほとんど人にくれてやつた。

ただ一人、それも無名の鹿島神宮宮司の日本画だけをたくさん買い込んで、それだけは離さなかつた。

書は鹿児島に赴任して、幕末の薩藩を代表する、鮫島白鶴が好きで集めた。なかでも、〈男子到此処之豪快〉の軸が気に入つて、床の間にいつもこれをかけた。昭和十一年一月十日の市会紛糾で、その夜に辞意を表明してからは、外出もせずよくこの書の前に正座していた。

一月二十七日夕の市会で市長の辞任が正式に承認されると、新聞記者がかけつけた。岩元禧は、

（男子ここに到つてはこれ豪快）

の、書の前で、ことは短に、

「先刻、市会議長からお話があつた。白紙に返つて市政のために働くのならともかく、そつでない限りは無理が伴つ。こつなつた以上はお互いやむをえないことで、自分としてもさつぱりした」

と、語つた。条件付きの妥協なぞ、口が腐つても応じたくない。

市会が決議案を白紙撤回せぬ以上、市長のイスに回帰する意思のないことを言外にこめた。まさしく床の間の白鶴の書の心境であつた。

後年、二男の紀彦（旭相互銀行常務）が上京して叔父、岩元禎に会つたとき、

「お前のおやじは一言目にはすべやめるといふ、あれは悪い癖じゃ」

と、四弟を評して苦笑したといふ。さつさと一人だけ、桜花の

花片のように散るのをいさぎよしとする。人間といふものは、しのびがたきを耐えて大事を成就するものである、と禎は語つたといふ。

その通りであつたようだ。決議案を用意した市会の大多数も、最初から岩元市長を辞任に追いこむ計画ではなかつた。

こんにち平瀬実武（県議）、脇田稔（南日本新聞社長）らによれば、岩元市長は当時の市議たちが到底太刀打ちできぬ行政の大家であり、鋭敏な頭脳の持ち主であり、清廉な人格者であつた。ただワンマンに見える部分に、灸（きゅう）をすえてやれ——という気持ちであつたといふ。

さらにいえば、議員の一部によくありがちな、人事の売り込みなどを、にべもなく拒絶された私怨（えん）が、いつせいに噴出したというべきであつた。したがつて、岩元市長が恭順のポーズをとるか、陳謝すればそれですむことであつた。しかしそれができないところに、この人物の真骨頂があつた。

余震が続いた。鹿児島市は第一助役の勝目清に市長代理を発令した。勝目は発令の日に辞表をだした。さらに田中議長が辞意を固めた。すると第二助役の黒江軍太郎も辞意を表明した。首脳部の連袂（ぺい）辞職もつわさされた。開市以来の混乱となつた。

結局、勝目だけが辞任し、田中議長、黒江助役は慰留された。そのあと平瀬実武らの市議が、岩元市長に殉じて辞任し、そのため補欠選挙が行なわれたほどである。

岩元禎の巻（21）

岩元文庫

昭和一七年の春、岩元芳は義兄・禎（てい）の病氣見舞いに上京した。前年の暮れ、駒場の授業中に脳貧血で倒れた一高の生物教授だった「ゼロ先生」も、病氣には勝てなかった。

生涯を独身で押し通し、老母のエイが看護に当たっていたが、四弟禎（き）の嫁の芳の応援を求めたのである。

禎の病勢はしだいに悪化した。七月初旬、鹿児島島の禎は電報を受けとって、すぐに上京した。医者はどう手だての方法がないので、本人の好きなようにさせなさいといった。

上京した愛弟に、重態の禎がいったことは、神田の本屋に注文しておいた北京からの本が着いている二百円ほどだ。すぐとってきてくれ・との指示であった。

本の虫であった兄の性癖を、禎はよく知っている。いいだしたら聞かぬこともわかつている。禎は神田に直行し、その本を運んできて、兄の枕許（まくらもと）に積んだ。

こんどはそれに蔵書印を押してくれと禎がいった。北京の篆刻（てんく）師に特別注文したという印と、いく通りかの朱肉を用意した。禎は兄からいわれるまでもなく、手を洗って押印をはじめた。

ところが重態の病人どのは、「この本はここ」「その本は・・・」と、いちいち指図するのである。禎によれば、蔵書印は本によって違つたのであった。

禎はまったく啞然（あぜん）となった。もう医者から見離された重態の床にありながら、本にだけは異常なこの執着であった。

「ゼロ先生」のニックネームで親しまれていただけに、有名な無名の教え子が見舞いに押しかけた。

田中耕太郎（のち最高裁長官）は、九鬼周造（哲学者）と共に目をかけられた一人であったが、「先生、退屈でしょう」といって、りっぱな蓄音機にベーターベンのレコードだけをそろえて運びこんだ。禎はすっかり喜んだが、残念ながらクラシックは

わからない。

それでもときどきベーターベンをかけさせ、「お前たち、わからんじゃろが」

と、芳たちに得意になったりした。

佐藤得二（戦後直木賞受賞）も、何回か見舞いにきた。「先生なにかほしいものはありませんか」という門弟に、「そつだ。薩摩緋（かすり）が着てみたいな」と、夢のようなことをいった。もう夏に入っていて、デパートや呉服屋を捜しても見つからなかった。佐藤は鹿児島島の知人に打電して、とうとう薩摩緋をとりよせた。

死の前後、妙な人物が玄關に立った。自分は先生から破門されている身であるが、ぜひともお目にかかりたいと懇請した。禎先生は、仕方がない・という表情で許した。作家の森田草平であった。

翌・七月一四日、岩元禎は気骨にあふれた一生をとじた。各界の指導的な立場にあった教え子によって、異色の「門弟葬」がいとなまれた。

さて、禎がいのちとも思ったおびただしい蔵書である。遺言によって、禎が鹿児島に持ち帰ることになった。

戦局はミッドウェー敗戦によって悪化していた。禎はようやく貨車一台を見つけて無事、鹿児島に送りこんだ。近所に一軒借りて整理した。漢籍、仏典、哲学書など貴重な本が多かった。禎にはそれらの本のページに兄の魂がこもっているように思えた。これが戦後、鹿児島大学に寄贈され、「岩元文庫」と呼ばれた。

岩元禧の巻（22）

陶工・長太郎

鹿児島市長のイスを、未練毛もなく捨てたときの岩元禧は、五十七歳であった。以後、公職らしい仕事はしていない。上荒田の自宅で、余生を楽しむつもりであった。

若いときから、書画骨董（とう）の趣味があった。刀剣にもこつた。しかし知人の子供達が出征のあいさつにくると、せんべつ代わりに刀を贈った。

盆栽を勧める人がいたが、

「あれは年寄りのすること」

と、六十過ぎても手を染めない。自分は老人ではない——と決めていた。

晩年の趣味は、薩摩焼き、それも長太郎だけといってよからう。初代・有山長太郎との出会いは古い。岩元禧は沖縄県知事を失意なやめかたをした直後、しばらく鹿児島暮らしをした。そのとき長太郎の人柄と陶芸を知った。

だから昭和八年に、禧が鹿児島市長に赴任してきたのを、最も嬉しく迎えたのは、長太郎であったかもしれない。初代長太郎は、明治五年、硫黄島に生まれ、十五歳で薩摩焼きの画士となり、他国の窯（かま）で修業した。

明治三十三年、谷山・清見橋のたもとに窯を開いたが、画家の黒田清輝から開眼され、目をかけられた話は有名である。

禧も七つ年上の長太郎の人物が好きであったし、長太郎も禧の剛気な性格を尊敬した。長太郎は窯明けの時は必ず禧を呼んだ。来れないときには禧の氣に入りそんな作品を別にしておいて後日上荒田に運んだ。

長太郎は晩年、辰砂（しんしゃ）で苦心した。銅の粉末で着色した、鮮紅色の釉（うわぐすり）である。もえるような長太郎の辰砂の壺（つぼ）を、彫るような目で見つめながら、禧がぼつんといったことがある。

「人間の血の色をだそうとしよる」

三男の毅郎（鹿児島市教委庶務課長）は、父のそのことを

いまでも忘れない。

昭和十五年秋、長太郎が脳溢血でなくなつたとき、幾人かの後継者が残された妻子を激励した。なかでも岩元禧と、外科医の東条経治が葬式次第から、遺業継承の方向まで指示して家族を感激させたが、岩元、東条のコンビは、鹿児島のよい芽を育てる点で呼吸をぴたりと合わせている。

二人は一中出身であったが、一中出身の彫刻家・安藤照の才能を高く評価して、その後援会づくりの先頭に立つたり、また若き日の岩元達一（山形屋会長）を衆議院議員に送るなどした。特筆すべきは「懇談会」のことである。

第二次近衛内閣が成立した、昭和十五年夏のころであった。禧の妻の芳によると、当時早朝六時ころ、“定時通話”のような東条経治から電話がかかってきた。東条は夜中に考えることをし、その相談を朝はやばと禧に電話するのである。

剛気な禧も、めつたに人に相談することはなかったが、ただ一人東条にだけは相手になつてもらつたことがあった。

二人の間で、「勉強会」の構想が固まつていた。三十代から四十代までの、たとえば「風を望んで立つ」といった志をもつた人物と、鹿児島でいう「芋こじ（せつさたくまのこと）」をやるうという試みであった。

勝目清、田辺健吉、佐々木武男を始め、相良長弘、桂久春、桝柴夫、平瀬実武、内宮正平、川村純二といった人たちを選んだ。平瀬はのち岩元とイデオロギーの違いで、たもとを分かつことになる。

岩元禎の巻（23）

「懇談会」結成

人間の生きる幸福が、心の友を幾人持つかにあるとすれば、晩年不遇だった岩元禎はきわめて幸福な一生だったともいえよう。禎は多くの友人を持ったが、なかでも外科医の東条経治は臨終の時まで、いやそのご幽明をへだててまで「刎頸（ふんけい）の交」の間柄であつた。

「東条博士の思い出」に、故人となつた田辺健吉が、両雄の親交を書いている。それによると、両者が多くの共通点をもつていたが、なかんずく高潔な人格と、学問に対する探究心、独立不羈（き）の精神は最高のものであつた。

そして東条は岩元に兄事していたが、四歳年長の禎は経治にたいし畏敬（いけい）の念をもつて接し、お互いに啓発し合い、そのさわやかな交友は若かつた田辺たちが、うらやましいほどの情景であつたという。

平瀬実武（現・県議）も、当時鹿児島島の人物といえは、岩元東条の両雄が、ずばぬけていた・と述懐するのである。

懇談会に戻る。

岩元、東条の両雄を中心に、勉強会が発足したのは昭和十五年秋であつた。初会合は南州寺で行つた。勝目清、田辺健吉、佐々木武男、相良長弘といった個性を持った人たち十余人が集まつた。時局を論じたあと、岩元の「維新史の見方」という話を聞いた。

禎は歴史に明るく、ことに島津斉彬にくわしかつた。薩藩のみならず、維新の出発点は斉彬である、と、一点の疑いもないというふうないかたをした。会は「懇談会」と名づけ、毎週火曜の夜に開き、当分は南州翁の研究をしようと禎が提案した。一同はその方法に従つた。

禎がいうには、薩摩人には西郷知らずの西郷びいきが多いが、同時に西郷知らずの西郷きらいもいる。いってみれば誰かの西郷観の上になつたつてゐる。

これではいけない。西郷が言つたこと、つまり多くの手紙

が残つているので、それを研究すれば西郷の発想法や、処世法や思想がわかるはずだ、と禎はいつのである。長兄・禎の特質であつた原点主義が、弟の禎にも脈々と流れていた。

「懇談会」のメンバーに、異論があるはずはない。禎の提案に従つことにし、世話役の幹事に相良長弘を選んで発足した。

次の定例会からは、相良が支部長をしていた天文館横の福德ビル二階の生命保険会社会議室を使い、ときどき高麗町の東条宅と上荒田町の岩元宅にした。

毎火曜の夜七時に集まる。まず西郷の書翰（かん）集を一時間ほど輪読する。そのあと岩元の話をきくという手順になつた。最後は茶菓で雑談した。決してアルコールはやらなかつた。輪読会のテキストは、平凡社が出版したばかりの渡辺盛衛編「大西郷書翰大成（全五巻）」を使つた。

この種の勉強会は、最初はほむらのように燃えさかり、しだいに火勢は衰微するものだ。岩元禎提唱の「懇談会」も、読みづらい南州の手紙の輪読のため、欠席者がふえていく。

その中で、男子師範付属教師の川村純二だけは、よどみなく朗誦（しょう）する。予習をちゃんとしてくれることが、誰の目にもわかる。岩元はこの川村の誠実さがすっかり気に入つた。懇談会の幹事役も、四・五回目から川村の仕事になつた。

岩元禧の巻（24）

「歯骨の人」を

「懇談会」は、岩元の死後も、遺志によって続けられた。東條経治に遺言があり、とくに桂久春、榊柴夫、川村純二の三人に鹿児島市の新しい教育を心がけるよう遺志が伝えられた。しかし、鹿児島市の空襲が激化を加えたため、懇談会は昭和二十年五月の例会をもって閉じるのである。

懇談会で、岩元が力説していたことが二つある。一つは前にもふれたが、島津斉彬のことである。南州はまさしく大人物であるが、下級士をふくめた当時何万という薩摩藩士のなかから彼を選び、彼を育て、そして彼を使いきった斉彬を窮めなければ、西郷は理解できないという。

また斉彬は江戸三百年を通じての、最高の政治家であり、人間としても抜群である・ともいった。そういえば、岩元もまた鹿児島市政に情熱を傾けたとき、斉彬を下敷きにしたともいえる。

斉彬は薩摩藩主にあること七十余日の間に、産業、工業、軍事、教育、社会の各方面にかつてない治績を残した。岩元もまた鹿児島市長としては、短い二年余日の間に、市庁舎、鴨池空港、中央卸市場の建設や文化面で業績をあげ、平瀬実武（元鹿児島市長）によれば、

「岩元禧こと、戦前戦後を通じての最高の名市長」

といわせるほどであった。

岩元のもう一つの力説は、

「人間は歯骨（はばね）がしゃんとしちやらないかん」

といういかたであった。維新時、回天の事業のために私利私欲をはなれて立ち向かったあの雄々しさが、「歯骨のしゃんとした者」であり、このころは「歯骨の折れたよつなのが多くていかん」と、嘆いたものである。

昭和十八年も暮れの夜であった。西田町の川村純二の家に珍しく岩元禧が

「おじやいやすか」

と、訊ねてきた。禧は自分のむすこほどの川村にも、ていねいなことは遣いであり、おだやかな物腰であった。用件というのは、こんど島津忠承公爵（当時日赤社長）の子息たちを、鹿児島であずかることにした。あずかるからには、「歯骨のしゃんとした人間」にしたいので、あなたに「叱（しか）り役」を引き受けていただきたい・というものであった。教育顧問になれというのだ。

当時、男子師範付属の一教師であった川村は驚いた。島津公爵家といえば、華族の中でも上級の名家である。自分たちとは別世界の人間に思えた。第一、物理的に、この手狭な借家に男子二人を起居させることすらが無理である。

岩元の要請を本心は断りたかった。だが、年の暮れのあわただしいさなかに、わざわざ足を運び礼をつくして、

「薩摩の教育を共にしもそ」

と、説かれてみれば到底断れるものではなかった。

引き受けるとすれば、家に預かることを別として、一つだけ条件を川村はつけた。

先生が叱り役をやれとおっしゃればやらせてもらってよい。

だが、私は島津家の家来になりたくはない。つまり給料などの報酬を必要としない。ただ「歯骨の人」を高のぞみするからには、忠承家の人たちが私を子息の師として扱っていただきたい・というものであった。

岩元は同意した。そういつ稜（りょう）々たる気骨を川村が示したことが嬉しかった。

岩元禰の巻（25）

叱り役

芭蕉に、「松杉をほめてや風のかをる音」の句がある。中夏の晴れた日、東南から吹き渡ってくる、緑のおつさわやかな風をつたいあげたものだ。

「岩元先生は、いつもさわやかな薫風（くんぷう）を発する雰（ふん）囲気を持っておられた」というのが、川村純一（鹿児島市美術館長）の述懐である。

この岩元禰から島津公爵家の「叱（しか）り役」を引き受けさせられた川村は、本腰を入れることにした。二人の子息をあずかるには、なんとしてもこの借家では困る。すると禰は、

「飛岡どんの屋敷がよか」

と、いった。両人は翌朝、平之町の飛岡卯一郎宅を見にいった。飛岡の家族は疎閑（そかん）していて、二十ほどの部屋が静まり返っていた。広大すぎて川村夫妻の手に負えそうにない。やむなく当分は玉里邸に入ってもらい、川村が通勤することにした。

島津忠承公爵の家族は、泰子夫人と四人の子女であった。川村が「叱り役」を受け持つ長男忠広と二男久正は、それぞれ男子師範付属小の五年と三年に編入と決まった。

川村は島津家から報酬を受けぬ、という約束の代わり、古びた自転車を一台借りることにした。戦時中は、中古の自転車が貴重な存在であった。冬の朝の、まだほの暗い伊敷街道を、川村は粗末なオーバーを着け自転車を通った。六時に玉里邸に着くのが日課であった。

忠広、久正の両少年に、川村がまず教育したことは、示現流の横木打ちであった。薩摩の土風から示現流の鍛錬を除いては考えられない。その血肉となった者が、どのように形成されたか、実物をもって教えるしかない。

少年兄弟は、もの珍しさもあった、白い息をはきながら、気合いをいれて横木打ちに立ち向かうのであった。

あるとき、長男の忠広が、一人で通学するのをしぶりだした。

東京で家令や多くの使用人に囲まれた育った華族の嫡子（ちやくし）にして見れば、無理もないことかもしれない。

くし）にして見れば、無理もないことかもしれない。

そのとき川村は、

「いやなら行かなくてもよろしい。学校は自分のために行くものです。行く気が起きるまで、これはあずかります」

と、勉強道具をとりあげた。やがて少年は非をわびてきた。

三条家出身の泰子夫人は、ときにぎびしすぎるような「叱り役」の薩摩教育を、微笑をもって見守っていた。川村が辞去するとき、粗末な川村のオーバーをていねいに肩にかけて、礼をただすのであった。

川村は毎週の懇談会に、叱り役の報告をした。岩元はわが意を得た・という表情でそれを聞き、

「あげなとこのし（衆）は、おつきが多うしていけもはんな」

と、貴族階級の没落を憂慮し、川村に謝した。

やがて玉里邸から平之町の飛岡家に移った忠承家の華族は、そこで空襲にあい、伊佐郡の山野（現大口市）に疎閑した。川村もそこをときどき汽車で「叱り役」に出向くのであった。

忠広少年は成長し、先年皇太子妃のうわさの高かった北白川家の肇子と結婚、川内市の中越バルブに着任した。結婚ひろうの時、川村は招かれて出席した。青年紳士・忠広の姿に亡き岩元禰の姿をだぶらして思うことであった。

岩元禧の巻（26）

埋蔵金を掘る

昭和十八年の初冬のころ、岩元禧の主催する懇談会の数人は、肥薩線の列車で宮崎県に出かけた。田辺健吉（経営者）勝目清（当時山形屋役員）といった人たちは、何年ぶりかでピクニックを楽しむ気持ちになった。だが岩元だけは、異なつた面持ちであつた。埋蔵金のことを思いつめていることが、会員にはよくわかつていた。

いぶし銀の光るような岩元禧の生涯で、この埋蔵金発掘の一件だけが「瑕瑾（かきん）」であるかのような評価をくだす人がある。

「東條博士の思い出」の中に、岩元禧と東條経治の比類ない友情が語られているが、こと埋蔵金のことになると、はれものにさわるような記述になっているのもその一例であらう。

しかし——である。生涯、破綻（たん）のない人間はりっぱであつても、魅力に乏しく面白味がない。ある時期、人生の軌道をガタンと踏みはずしてこそ、その人間像に血行が通つて身近な存在になることが多からう。

岩元禧が、

「都城の近くに、黄金が埋蔵されていもす」

と、ある日の「懇談会」で言いだしたとき、一同は遠い国の伝説として聞いていた。禧によると、その黄金は島津の遠祖が、他日に備えて、確かに埋めた軍資金であり、しかも莫大な量におよび、そのことに触れた古文書は信頼度の高いものである——というものであつた。

普通の人がいいだせば、笑いとはすような内容であつたが、歴史に造詣（けい）が深く、何事にも全幅の信頼がおける岩元先輩の言であれば、何かがあるように思えた。「一度探索に」といいだした禧の提案に、会員の有志は押し切られてやってきたものであつた。

一行はその夜、真幸温泉に泊り、翌朝吉都線で現地に向かった。都城の二つ手前の谷頭駅で下車した。鉄路の東側の道を北

に向かつて二^里ほど歩くと、丸谷川が東西に流れていた。その北岸が、黄金を秘蔵して眠り続けていると禧のいう薄谷（すすきたに）の現地であつた。

同行した田辺健吉によると、何の変哲もない冬枯れの畑地を前にして、岩元は埋蔵金の歴史について説明を長々と始めた。氷雨の中に、会員たちは立ちつくして、それを聞いていた。

説明の後、岩元だけは熱心に地質などを調べていたが、一同にはほとんど興味も関心もなかった。岩元に聞こえないところで、一人がいitta。

「本当に黄金が出つじやるかい」

みんな、そんな気持ちであつたようだが、東條経治（外科医）だけは、

「先生がしゃいこつじやで」

と、一同を説得するような態度でいつた。川村純二はそのとき、東條自身が埋蔵金には疑問を持つていながら、岩元禧が始めたからにはそれに従つよりないとする経治の友情を感じた。年が明けると、岩元の薄谷への執念は日と共に強くなつた。

川村が助手役を務めねばならなくなつた。鹿児島、宮崎両県の警察部長へ連絡もし、また九州帝大の電気探鉱関係者の応援を求めたりした。

川村が知っているだけでも前後四回にわたり、現地で人夫を頼み発掘を行なつた。岩元は古文書によつて作つた地図を広げ、場所を少しずつ変えて掘つた。

岩元禧の巻（27）

冥府へのみやげ

結果から見ると、伝説じみた古文書の「埋蔵金」を、真剣に掘りあげようとした岩元禧の所業は、奇怪に見え、滑稽にも映る。しかし当人は、はなはだまじめであった。いや、真剣に思いつめていた。「国家の運命」を、であった。

発掘に着手した十九年の初春は、米軍がマーシャル群島に上陸し、クエゼリン・ルオット両島の日本守備隊は全滅し、国内では決戦非常措置要綱を決定するなど、戦局は日を追って悪くなっていた。

物と力ネがたらない。岩元が埋蔵金の発掘という途方もないことを思いつたのは、掘りあげた黄金を、祖国の窮迫している戦費にあてたい、という一心であった。そして一部を教育に役立てたい、ともらしていた。

親友の東條経治は、埋蔵金には疑問をもっていたようであるが、岩元の愛国の至情につたれ、批判めいたことはいつさいいわずに、発掘費用のほとんどを援助した。

岩元が、薄合（すすきたに）の発掘をいたほどやったものか、さだかではない。しかしさまざまな人の協力をえて、かなりの回数に及んだようである。

川村純二（鹿児島市美術館長）は当時、教職にあっただけに、土曜の午後から日曜は比較的自由であった。岩元から学校に電話があり同行をおおせつかった。

車中での禧は、口数は少なかったが、はかばかしくない発掘にはしよっている様子はなかった。

薄谷の現地につくと、手配していた人夫が待っていて、すぐ発掘にとりかかる。一ヘクタールからせいぜい二ヘクタールほどの畑地や原野を掘りあげる作業の繰り返しであったが、白いシラスの砂がむなしくでてくるだけであった。禧は自分でこしらえた図面に、そのつど一つ一つ印をしているようであった。

川村が手伝った十九年の最後の発掘作業の時、本土来襲の米軍機は一行の頭上に迫るほどの緊迫度を深めたが、やがて岩元

も病臥によって、埋蔵金発掘は休止となった。

埋蔵金には後日談がある。

昭和二十一年、榊柴夫（元・県議）は川村純二とともに、東條経治から招きを受けた。東條は高麗町の自宅を戦災で焼失したあと、始良郡の妙見（牧園町）の山荘にいた。

戦後の混乱で、バスはまだ回復していなかった。榊と川村は肥薩線の嘉例川駅で下車して歩きだした。やつのことで、東條の山荘にたどりついた。畑仕事をしている百姓に案内を請うと、それが東條博士であった。

その夜、二人は泊り語り明かした。東條がいうには、自分は珍しい胃病をわずらい、手術をしたものの、そう長くはないと思つ。ついでに岩元先生の埋蔵金のその後が気にかかる。あなたの方の手で、見きわめてほしい——という遺言めいたものであった。

話はさらに昭和三十一年五月初旬に飛ぶ。川村純二は、当時鹿児島県の公安委員長であった東條経治から、

「あの世で岩元さんに会ったとき、埋蔵金はいけんこわしたかと必ず聞かれる。その時、がつついた返事がでくいい。」

と、再度薄合への同行を求められた。数人の電気探鉱技師を伴つて、くまなく半日ほど掘った。もちろん何もでてこなかった。

「サバサバしました。こいで岩元さんへのあの世のみやげができました」

そついつて明るく笑った東條の顔を、川村はこの世でもっとも美しい男の顔だと思った。

岩元禧の巻（28）

国土の死

晩年の岩元禧は、祖国が戦いで傷つき、その傷を深めていくことにいらだっていたようである。

「加藤隼戦闘隊」という映画が、鹿児島でも評判になった。禧も見にでかけた。俳優・藤田進ふんする加藤隊長の陸軍戦闘機隊が、敵の上空を縦横にかけ回って大空中戦を演じる。敵機が背後から迫ると禧は大声で

「危い」

と呼び、味方が撃墜すると激しい拍手を送った。禧には俳優・藤田進が、実物の加藤隊長に見えたようであった。

昭和十九年七月中旬、鹿児島市長の久米成夫は任期満了で退任した。数日後、押川市議ら九人が、岩元邸を訪問した。月の明るい夜であったことを、禧の妻の芳は記憶している。一行の用件は、

「この際もう一度、市長に返り咲いてほしい」

という、就任懇請であった。禧は好意を謝しながらも辞退した。一行が帰ったあと、芳がいった。

「名譽回復のため、お受けやしたら」

すると禧は声をふるわせて、

「お前（まい）は浪人暮らしが、いやになったとか」

と、芳をにらみつけた。その翌日から、禧は病臥した。肝硬変であった。禧を知る人たちは（無理もなか）と、嘆息したことであろう。好きなショウチュウや泡盛を、生（き）のままで飲み続けた人であったからだ。

病臥一カ月近くで、すっかり衰弱した。当時、東京の戦時金融公庫に勤めていた長男・和秋（鹿大教授・財政学）を始め、子女を呼び寄せた。

もちろんアルコールを禁じられていた禧は、帰ってきた長男に、自分の枕元で晩酌をさせた。和秋がゆっくり飲む酒を、じっと見守っていた。

小康を得たため、和秋たちはそれぞれ勤務地に帰っていった

が、九月の十日過ぎになって容態が悪化した。再び子女に打電した。

その日、岩元禧の病室には家族全員と、東條経治らの親友が顔を合わせていた。長男の和秋はまだ帰郷していなかったが、禧は妻の芳に向かって遺言を始めた。紀彦（次男）は病弱だから、よくいたわること。出生中の毅郎（三男）は、国にさげた身であるから、最悪の場合でも取り乱してはならん——といった調子であった。最後に九十二になる老後のエイに「お母さん」と呼びかけた。

「あたいは先に行きもんが、お母さんはちつとも心配はいりもはんど。芳が面倒をみもんでなあ」

いずこかへ旅立つ前、留守中のことを指示するような平穩な態度であった。そして最後に、生涯の友であった東條経治に向かっていった。

「おまんさあの手でも、どうにもないもはんか」

東條はしばらく瞑目（めいもく）していたが、静かにそしてきっぱりといった。

「あたしの手でも、どうもなあはんなあ」

禧はその声に、むしろ安堵（ど）を覚えた。やがて眠るように死んでいった。昭和十九年九月十四日、六十五歳の生涯であった。唐湊墓地に葬られた。

不世出の政治家にとって不遇な晩年であったが、ただ彼の最も愛してやまなかった祖国の、翌年の敗北にあわずして世を去ったことが、せめてもの救いであったと、筆者には思えるのである。＝終わり＝